

開催日時：2022年9月26日（月）16:00-18:00

開催場所：東大本郷キャンパスとオンライン会議とのハイブリッド開催

参加人数：工学研究科副研究課長、教授など中心に30名程度（人社：2名程度）

議論の主なテーマ：総合知を活用できる高度知的人材の育成

プログラム概要：

- ・内閣府より総合知の説明
- ・東大の人材育成プログラム紹介（8件）
- ・意見交換

紹介された事例（育成プログラム）の概要（8件）

①未来社会協創国際卓越大学院(WINGS-CFS)：

対象：全研究科、専攻の学生が応募可能(修博一貫プログラム/各学年定員30名)

履修内容：学内(研究科/専攻、附置研究所、etc.)及び学外機関・企業(産官学民)等と連携して、イノベーションの社会実装を実現する力を養成することを目指した研究と教育の一体推進を図っている。教育面では、産官民の協力の下、文系/理系の182の講義(座学、演習、実習)をプログラム生に提供している。

② One Earth Guardians育成プログラム”：

対象：全部局からの受講可能（2022年度～）1～5期で60人超の受講生

履修内容：あらゆる生物が共存共生する地球の未来を目指し、俯瞰的に課題を見出し解決に向けて行動することのできる科学者＝One Earth Guardians（地球医）を育成する。従来のジェネラリストや専門家を超え、各専門分野でのトップの実力を持ちつつ巻き込み力をもった科学者を育成し、そのネットワークを形成させる。基礎地球医学、応用地球医学で構成されるカリキュラムのほか、学生と社会人が参加する対話型ワークショップ（One Earthology Seminar）、学外講師を迎えた講演（LUC Lecture）や、企業等とのコラボレーションワークショップなどを実施している。

③プロアクティブボックス環境学国際卓越大学院プログラム（WINGS-PES）：

対象：修士、博士の大学院生、社会人学生

履修内容：未来の課題を先取りし、社会の進むべき方向をプロアクティブに提示する「環境知プロフェッショナル」を養成することを目的としている。技術を組み合わせたインテグレーションによるものづくり・開発・研究への応用法のアイデアを練り、討論とその成果のプレゼンテーションを通じ、研究の企画力、構想力の向上を目指す。座学および成果物を共同で作成する演習を行う。

紹介された事例（育成プログラム）の概要（続き）

④グローバルリーダー育成プログラム（GLP-GEFIL）：

対象：語学力や意欲により全学部から選抜（約100人）した学部学生（3年次以降）が中心

履修内容：「GEFIL実践研究」「グローバルリーダー講義」や海外プログラム等を通じて、専門の学術的能力を基礎としつつ、外国語コミュニケーション能力、分野を越えて協働する力、地球社会が直面する困難に革新的な解決を提案できる発想力を育成する。

⑤社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム（WINGS-GSDM）：

対象：博士課程D1、D2（プログラム修了生 84名）

履修内容：国、国際社会等の課題解決において、グローバルな視野で専門的・俯瞰的な知識を用いて課題を発見し、革新的科学技術と公共政策の統合的解決策を提示（デザイン）し、多様な関係者と連携して実行する必要がある。このため、多様な関係者と連携して実行できる人材の育成を、社会課題に関してグループ議論・共同作業とプレゼン、学生主導プロジェクトなどを通じて実施している。

⑥ソニー社会連携講座「創造設計とスタートアップの実践」：

テクノロジー、デザイン、ビジネスなどの様々な切り口で実施。越境と融合。

対象：東大、藝大、学部～大学院生、社会人（2019～2021年度完走者184名）

履修内容：テクノロジー×デザイン×ビジネスのスタートアップ手法を、社会実装を通じて身に付けることを目的とした実践型の教育プログラム。企画運営や学生プロジェクトへの伴走支援を行っており、学生が、講師の支援のもと、オーディションだけでなく、トレーニング・ワークショップまで含めた一気通貫のハンズオンのプログラムを通して、企業・社会実装・クラウドファンディングを経験し、アントレプレナーシップ精神を実践で身に付けることを目指している。

⑦エネルギー連携研究機構：

対象：全学の学生が対象

履修内容：「エネルギー総合学」エネルギー問題に関する社会からの強い要請に応え、安心安全で豊かな脱炭素社会を実現する課題解決法を開発・実装すると共に、文理融合の新たな学理を創成する総合大学の強みを生かしエネルギー問題解決の牽引役となる人材を育成する。「エネルギー総合学教育プログラム」+「専攻の学位」

⑧気候と社会連携研究機構：

対象：学部・大学院生に対する教育体制を整備

内容：分野を超えて本学の世界の学知を結集する拠点を形成し、科学的エビデンスに基づき、気候変動問題を克服する社会の在り方を模索する研究活動を展開している。個々の持つ国際ネットワークを駆使し、次世代の研究者が世界で活躍できるような国際拠点を構築し、GX推進に協力し、広い視野をもつ若手人材を教育する。学生が他学部の講義を聴講することも可能。

討論における主な意見

(場の構築)

- 俯瞰的、課題解決のプログラムを増やす誘導により世の中も変わるのではないか。
- 総合知をアカデミアに置くためには、附置研としてシンクタンク的に置いたほうがよいのではないか。
- URAの繋ぐという仕事は、人と人、アカデミアと社会、組織と組織を繋ぐとことで非常に重要だと思うが、繋ぐだけでは駄目で、そこからどのような新しい価値を創出できるか、実際に役に立つとか社会に貢献できるかがURAの本来の意義と思う。具体的に総合知を実現する中でURAがどう活躍するかが重要になると思う。

(人材育成)

- (総合知的取り組みを) 人に対してサポートを継続的にする仕組みがあれば大変ありがたい。そのような仕組みがあれば、大学で総合知に必要なものは何か、検討しながら人に支援を当ててくことができる。
- 繋いで新しい価値を生み出すという総合知の概念はURAと相性が良いと思うため、URAに期待していることは何なのか、そのようなURA人材が輩出されていくための仕組みとして総合知がどう活用されるのか、積極的な議論を望む。
- あまり真面目に考えていなかったことが結果的にイノベーションにつながったりする。総合知の力を育むプログラムの中でもそういうことを企画すべきなのかと感じた。

(総論)

- 何のための総合知なのかが非常に重要。何のための総合知なのかを定義してかからないと滑ってしまう、目的がない限りはまっていけないと思う。
- 総合知自体をシステムティックレビューする、システムティックレビューが難しい場合は似たようなレビューを行ったり、概念を整理したりする必要があるのではないか。